

徒花であつてそうでなし

サンゴ礁

想いを寄せる男がいる。既婚の男だ。

そして、私の親友である。

彼は惹きつける人だ。陽光を返す金髪など見目においてもそうだが、彼の堂々とした立ち居振る舞いだ。彼のそれには安定感を覚え、誰もが頼りたくなる。しかしひとたび話をすると、気さくで人好きのする性分が現れるのだ。肩までも預けたくなるということだ。それは初対面の私にも存分に發揮され、その日の内に彼は私の脳裏に焼き付いた。なによりも、彼の笑顔は眩しい。

私のように、退屈を退屈とも感じない停滞の年月を送ってきた者が彼に想いを寄せるのは、もはや当然のことだった。そうだ、確かに彼と出会ってから私の人生は動き始めた。食を楽しむことも、友と日々の事を語り合うのも、全て彼から教わった。

彼の話すことは、私には全くの未知のものであり想像もつかないことばかりであったが、言葉だけであるのに心臓がどくどくと動いたのを感じた。私自身語れたことはつまらないものだったろうし多くはなかったが、それでも彼は楽しそうに聞いてくれ

た。彼は私にとって太陽であり、風であつた。

どうやら彼も村の長らしく、驚いたものだが立場を同じくするもの同士、互いの村から離れた森の中で交流を深めた。

転機が訪れたのは、彼の村が土砂崩れに巻き込まれた時だ。幸い、怪我人などの被害はなかったようだが、その地の再度の復興は絶望的なのだそうだ。数日振りに会った彼は、新たな移転先に随分と頭を悩ませているようで、珍しくも覇気がなかった。

だから、つい、出てしまったのだ、私の村に来るか？ と。微量とはいえ下心のある発言であつた。サツと血が引き下がり言い訳を頭に並べ立てる。いや、存外悪くないではないか。少し手を加える必要はあるが土地は十分に余っているし、村人は変化に無頓着であるし……樂觀的ではあるが、私のように彼らの文化に影響を受けることも、あるかもしれない。

彼は少しぼかんとしたあとに、私が弁明するよりも早く私の肩を掴むほど前のめりに食いついた。足を一步引きそうになつた。その日は、君の所の人たちが良いのなら、私の方は問題が無いと伝えて別れた。

とんとん拍子。驚くことに話はすぐに進んだ。住

む場所という喫緊の問題であることを差し引いてももつと時間がかかる、はずだ。移動先が知らない人間の村なのだから……いや彼が村でも信頼されている、ということか。とにかく、次に会った時には私の提案を受け入れると返事が来た。

「本当に助かったよ」整地、仮の住まいづくり、夕飯の準備など彼らの営みを眺めていたら背後から声をかけられた。

「作業おつかれ。だから気にしなくてもいいって、提案したのは私だし。……むしろ全部任せつきりでごめん」

「それこそ気にしなくていい、こういう力仕事は俺たち得意だからさ」

「そうそう。君に紹介しようと思ってね」

「？ あホントだ。君に隠れて気づかなかった」

「あーなんか照れるな……この子、俺の婚約者。ほら出てきて」婚約、者。彼に言われてその子は一歩前に出た。

ああ、勝てないなあ。一目見ただけで分かった、彼女はとても愛らしい子で、少し緊張した面持ちには庇護欲が湧く。親友は、こういう子が好きなのか私とは、まるで正反対だ……。固まっついてはいけない。何か、まずは祝福の言葉か、言わないと。

「は、初めまして。いつもお話、聞いています！ 私は日華つていいます」

私が何かを言う前に、彼女はよく通る声ですとお会いしたかったですと続けた。その声はすうと私の中に入り込んで溶け消える。彼女、日華ちゃんが良い子だと、心の底から確信した。同時に、親友と結ばれる子が日華ちゃんのような子であることを嬉しく感じた。

そうやって自分の想いの一旦の置き場所が見つかって、普段のように、親友としての言葉を話すことができるようになった。「驚いたよ、お前に婚約者がいるなんて」「それなのに頻繁に村を抜け出していたのか？」

「日華ちゃん、嫌なことがあったらいつでも私の所に来ていいよ」

「俺がにっちゃんの嫌がることすると思っていんのかあ？」

「何があるか分からないだろう？ その何かがあったら私は日華ちゃんの味方になるよ」

「俺と言う親友を差し置いて？」

「だ」

無邪気で無垢な少女。夕方に差し掛かり、いい時間だからと切り上げようとした私を引き留めて、彼

女は料理を振舞ってくれた。やはり初めて食べるものだらけであったが、そのどれもが美味しく、食べる手が止まらなかった。そんな私を二人して微笑ましそうに見ていることに気づいた時は気恥ずかしく感じた。

一番が生涯変わることはなかったが、また一人惹かれる人が増えた。

私は、二人の祝言を取り仕切った。当人が引越してきたばかりで後ろ向きだったからだ。結果を言うと、式は成功した。私の村の人々も巻き込んで盛大な式を行ったが、そこで初めて体験する料理に舌鼓を打ち、移住者に興味をもった者がでてきた。私と同じだ。一つきっかけがあれば、彼らは交流を始めざるを得ない。彼らの文化は魅力的なのだ、停滞しきった私たちには。後は良い方向に流れるだけだ。

それから色々な出来事があった。同じ村に暮らすようになって、関わる時間が増えて、彼と共に遠出し、彼の体験を私も共有することができた。

鮮やかな日々だった。

停滞の私は彼と出会って動き出し、どんどんその流れが速くなった。遂には彼の速さに追いつけた

だろうか。それは今でも分からない。

彼は、時と共に変化していった。

私は、出会った頃と今なら変わらない。その違いの結末は、こうだ。

布団に寝込んだ彼。何の病気にかかったわけでもない。ただ、身体が限界なのだ。彼の肉体は老いてしまった。鍛えられていた身体の筋肉は痩せ落ち、瑞々しさも消えた。彼の持つているほとんど多くが失われてしまった。それでも、残るものがある。彼の力強さだ。彼に肩を預けたいと、共に支えあいたいと、一体何がそう思わせるのか分からぬままに、彼のそれは健在だった。

今日もまた、彼を訪ねる。随分とゆっくりになってしまった会話も、語るほとんどが私であることもまたいい時間だと思つた。……彼の話が聞けないのは、少しだけ寂しい。

彼が私に腕を伸ばす。よろよろとして不安定だ。

それでも確実に向かって来る。私はそれをじっと待つ。彼の手が頬に触れた。水分もハリもない皺くちゃの手だ。私の頬をじつと包み込み、緩く容を確かめられる。とても温かかった。

そのとき目が合った。久しぶりの事だった。眼光に衰えはなく無意識に背筋が伸びた。彼は一言呟い

て、腕から力が抜けた。瞼も下ろされた。静謐な空気が彼を覆った。

私は彼の状況を理解し、彼の一言を受け止めた。不思議と涙は零れなかった。私は、薄情者かもしれない。

彼は輝いて見えた。初めて森の泉で出会ったときから布団の上で日に日に老いていったとき、全ての瞬間において彼は輝いていた。

しかし、同じ長さ（とき）を生きられないのなら、やはり結ばれない方が良かったのだろう。